ハレバレモンスターSTORY

第１章

第10話　私たちの夏

それから僕たちは花火を渡し、間も無く再開する花火大会を少し離れた河岸で待っていた。

「みんなずぶ濡れだな。」
「まぁ暑いしすぐ乾きそうだからいいよ」
「アタシも大丈夫〜」
「帰ったらお母さんに怒られるかな」
『もうすぐだね。』
遠くから再開のアナウンスがうっすらと聞こえる。
僕たちの夏休みの集大成。
そして

どーーーーーーーん

体に響くような音と共に僕たちの花火が打ち上がった。
時間にしてみれば3秒もなかっただろう。
その何10万倍の時間をかけて準備をした僕らの花火。
誰もがその一瞬を目に焼き付けるように釘付けになっていた。

「ねぇ見た？」
「ああ」「うん」

視線は夜空を見上げたままみんなが答える。
目の前で次々と打ち上がる花火が視界に入らないほど僕たちは余韻に浸ってい

た。
『キレかったーー最高！』
「ほんと、なんだか夢見てるみたい」
「なんていうか、すげ」「ああ」
「みんなホントにありがとう。」
「いいって。俺も久々にぶっ倒れるくらい限界まで走れたし、そのおかげで色々吹っ切れたんだ。だから俺のほうこそありがとな。」
「まぁ花火持って走るなんてそうそう出来る経験じゃないしね。」
『そういえば、ホーミンはなんであんなたくさんのビニール袋持ってたの？』
「えっ、あの、ゴミが落ちてたら拾おうかと思って、その、委員会のクセで」
「来期も美化委員続投だな」「ええっ！？それは・・」
『あははっ。でも、あの時ニックんがみんなに指示出してくれたから間に合ったんだよね』
「そんなことないよ、ただ僕は僕で諦めるのが嫌だったんだ。」
『へえーー』
「なにっ？」
『別にー最初はあんなに渋々って感じだったのになーって』
「うるさいな。・・・楽しかった。本当に。夏休みが終わらなければいいのにって思うくらい」
「ええっ！？”夏は暑いし嫌い”って言ってたニックが～！？」
「夏と夏休みは別なの」

『よし！明日の放課後、みんなわかってるね？』
「コロッケだろ？」
「そうだ！ko-ko屋のお兄さんにお願いしてアタシたちのコロッケ花火を商品にしてもらお～よ～」
「花火ならいいけど、食べ物であの色合いはキツくね？」
「紅芋とかあるじゃ～ん」
「私の緑ならお野菜と混ぜたら出来るのかな」
「ホーミンも乗り気なのかよ」
『いいじゃん、いいじゃん！明日みんなでお願いしてみよ』

『それじゃ、みんなまた明日！』